

マラルメにおける旅の主題

—死を賭した旅立ちとその果—

三 好 郁 朗

海原をゆく大帆船^{オウゴン}の旅とマラルメ、およそこれほど遠く隔つたイメージはないかのようなのである。部屋の人、静寂の人とよばれ、ひたすら研ぎ澄ます意識の湖面に冷徹の美の映えるのを凝視する姿は、旅ならばむしろ、聖地巡礼の徒歩の旅に似るといふべきであらう。

しかるにマラルメ自身が己の旅の理想と宿命を、常に、「雷と真冬なす浪掻き分けて」ゆく帆船の姿に託して歌うのである。⁽¹⁾

思えば、旅とは本来一つの脱出行為であらう。逃避が契機となるかもしれない、発見が希求されているかもしれない。いずれにせよ、何ものかからの脱出こそ、旅を、とりわけ精神の旅を特徴づける。そして十九世紀後半の空を彩る象徴派の詩星達にとって、この脱出は、まさしく現実からの、自己と世界の現実からの脱出にはかならなかつたのである。

ランボーの脱出は完遂されて、未開地の気候がその肌をなめした。遂に現実から片足を抜ききれないボードレールの魂は、平穏と調和

を求めてむなしく、醜怪と不浄の廃墟に一輪の惡の華とひらく。
そしてマラルメの旅は、これも又脱出、嵐と破船の予兆がみなぎる海原への、いわば自殺的なやむにやまれぬ旅立ちなのであった。

註1 引用は『Salut』からであるが、

...qui coupe/Le flot de foudres et d'hivers ;

このソネットのように、帆船と海をうたった作品は、『マラルメ詩集』に四編ある。

— Brise Marine

— Salut

— Au seul souci de voyager...

— A la nue accablante tu...

これらに遺作、

— Un coup de dés jamais n'abolira le Hasard

を加えた五編をとおして、詩人マラルメの辿った旅路とその果をかいまみるのが、この小論の目的である。

旅へのいざなう

Mon enfant ma sœur,

Songez à la douceur

D'aller là-bas vivre ensemble! (Baudelaire: L'invitation au voyage)

ボードレールがサバンチェ夫人を誘う旅は、「汝に似る国」への
(Au pays qui te ressemble) とうとう二人が愛し、死ぬ (Aimer
à loisir/Aimer et mourir) 国への旅であった。そこではものみ
なすべつが調和と美のみがこころ。

Là, tout n'est qu'ordre et beauté,

Luxe, calme et volupté. (ibid.)

そしてこうした異邦への旅のおもいは、ほとんどの場合、恋人へ
のおもひによつて換起された。

Quand, les deux yeux fermés, en un soir chaud
d'automne,

Je respire l'odeur des rivages heureux,

Qu'éblouissent les feux d'un soleil monotone ;

(Baudelaire : Parfum exotique)

ボードレールの旅は、汚辱の現実からの脱出であり、同時に、旅
路の果に平安と調和を夢みる悲しい希望でもあった。地獄におちた
魂の吐く毒の炎が、救済への希求にも似た涙に洗われる時、この二
重性こそボードレールの大きなでなければならぬ。しかしそれは
また、マラルメのような精神にとっては、乗りこえるほかのない二

元性とみえるのである。

「悪の華」のはげしい呪咀が若きマラルメをとらえ、そしてぬき
難くうえつけたものは、現実の憎悪、詩人の不運、倦怠、さらに抑
えきれない脱出へのおもひであった。若き崇拜者の天性を無慈悲に
殺しかねない毒の大輪——近親への愛はしばしば、憎悪と隣接しか
ねない。やがてボードレールは、マラルメにとって、乗りこえねば
ならぬ、否、無限の努力で否定しなければならぬ存在となる。ひた
すらな自己確認の途上によこたわる巨大な岩石として。

理想と現実という、ボードレールの根底にある二元論を、声を高
めて弾劾する時、師のおしえた呪をつきつめる為に師の中にたゆと
うリリシズムを拒否する時、マラルメの声は、巨大な妖星の引力を
ふきつて、まさに無限空間に飛び去ろうとする彗星の、うめきを
伴う身振に似る。

しかし、理想と現実が姉妹でないことをなげくのは愚行だ、とき
めつける時、

Il confond trop l'Idéal avec le Réel. La sottise d'un
poète moderne a été jusqu'à se désoler que ⁽¹⁾ « l'Action
ne fût pas la sœur du Rêve » (Lettre à Cazalis. 3 juin
1863)

すでにマラルメがこの二元論を発展解消せしめるような、全く新し
い弁証法をふまえていたわけではなかった。ボードレールにおける
現実への憎悪は、脱出の決意、平安への希求をめぐり、やがて、憂
愁にみちてではあるが「原罪の都」に回帰し、常に円を画きつづけ
る。マラルメはこの憎悪を、まことに形而上的ではあるが研ぎ澄

し、遂には己れの詩と思想の世界に、現実のたとえ一要素たりとも混入することを拒否しようとする。師をのりこえる瞬間は、師の教義の一面の極限化の彼方にあつた。

理想と現実の間に、無限の距離が存在する。生身の人間の遂に破りえない水晶の窓ガラスが、両者を決定的に隔てる。現実のボロをひきずつての脱出は遂に不能である。詩人とは、現実での死を賭して、つまり完全な奈落への転落を冒して、あえてこの脱出の術を求める者でなければならなかつた。

Est-il moyen, ô Moi qui connais l'amertume,

D'enfoncer le cristal par le monstre insulté

Et de m'enfuir, avec mes deux ailes sans plume

— Au risque de tomber pendant l'éternité?

(Les Fenêtres)

問題はこの精神的死復活とでもいふべき脱出手段の困難さにある。散文「イジチュール」が遂に未完に終るのは、論理の英雄たる主人公がその追求の必然的帰結として自殺という手段を遂行したが故である。肉体の死はいかに完全な現実否定であらうと、それは詩の完成をも否定するはかない敗北であらう。マラルメの不毛と無力は、この越しがたい矛盾の谷間によとむ苦惱のあらわれであつた。

La chair est triste, hélas! et j'ai lu tous les livres.

(Brise Marine)

生身の人間である詩人の悲哀とむなしい努力が、今、きわまる。かつて苦惱のさなか、みずから首を縊つた詩人がいたが、

Ces héros...

Vont ridiculement se pendre au réverbère. ^(c)

(Le Guignon)

マラルメは今、病みつかれてはいるが、窓の彼方に美そのものの空をながめやまない。

Son œil, à l'horizon de lumière gorgé,

Voit des galères d'or, belles comme des cygnes,
Sur un fleuve de pourpre et de parfums dormir
En bergant l'éclair fauve et riche de leurs lignes
Dans un grand nonchaloir chargé de souvenir!

(Les Fenêtres)

かくては脱出のはかない。彼方にこそ理想の境がひらけぬのは、
あれは、今は旅立ちのときである。

Fuir! là-bas fuir! Je sens que des oiseaux sont ivres
D'être parmi l'écume inconnue et les cieux!

(Brise Marine)

大海遠くすでに飛びゆく心は、もはや現実のいかなる幸福もこれを引停めない。

Rien, ni les vieux jardins reflétés par les yeux
Ne retiendra ce cœur qui dans la mer se trempe
O nuits! ni la clarté déserte de ma lampe
Sur le vide papier que la blancheur défend.

Et ni la jeune femme allaitant son enfant. (ibid)

なぜならこの世の幸福は穢らなしいものでしかなかったのであるから。かくてマラルメは、完全に現実から背をむけるのであった。

Le bonheur d'ici-bas est ignoble — il faut avoir les mains bien calleuses pour le ramasser. Dire : « Je suis heureux », c'est dire : « Je suis lâche » et plus souvent : « Je suis un niais ». Car il ne faut pas voir au-dessus de ce plafond de bonheur le ciel de l'Idéal, ou fermer les yeux exprès. (Lett. à Cazalis, 3 juin 1863)

Je fuis et je m'accroche à toutes les croisées

D'où l'on tourne l'épaulé à la vie... (Les Fenêtres)

ボードレールは「通れむ」とおぼへなかつた。この地の混濁の中で憂鬱にとらわれてはいても、恋人を誘う旅路の果で、そのややかな願望がかなえられるとすれば、それは逃走ではない。楽しき船が港に待っている。

C'est pour assouvir

Ton moindre désir

Qu'ils viennent du bout du monde.

(L'Invitation au Voyage)

「原罪の都」パリを遂にはなれることにならずボードレールは、低調平凡な日常の外界に、新しい意味を発見しようとする。そうすることにより、外界は詩として、また美として、享受可能なものに変貌するのであった。たとえばジャンヌ・デュバルの髪の匂いから、

はるかな大海をめぐり、やがて砂漠の縁地にまで夢想の旅のひろがりゆく時、手垢にまみれた外界の対象は新らたに意味を発掘され、その業績が、倦怠に病んだ詩人の崩れゆく主体を最後の一瞬に救うのである。

誘い、伴う人もないマラルメの旅にとって、約束の地はいずか。それはいまだ詩人自身にも知りえぬ事であった。ただひたすら脱出の想と、至上の訣別への確信がそそぐ。

Je partirai! Steamer balayant ta nature

Lève l'ancre pour une exotique nature!

Un Ennui, désolé par les cruels espoirs,

Croit encore à l'adieu suprême des mouchoirs!

(Brise Marine)

かかる旅立ちの為の旅立ちはおそろしく、自から嵐を招く旅であるまい。偽りにみちた世紀において小さな肉体でしかない詩人にとって、完全な現実否定とは常に肉体の死に到る危険をはらんでいる。かかる死は、その虚無ですべてをおおい、旅ははたされないのである。いわばこのジレンマの支配する次元をこえた次元においてはじめて、詩人は精神的死復活をなしとげ、世界と自分の存在の意味を確立せしめるのである。この至難の旅の行手は、異邦の岸であるよりむしろ、むなしき破船の宿命でもあろうか……

Et, peut-être, les mâts, invitant les orages

Sont-ils de ceux qu'un vent penche sur les naufrages

Perdus, sans mâts, sans mâts, ni fertiles flots... (ibid.)

恋人の傍にいてボードレールが、芳香の中にすでに安息の港を画

あゝる時

Guidé par ton odeur vers de charnants climats,

Je vois un port rempli de voiles et de mâts

Encor tout fatigués par la vague marine,

(Parfum exotique)

マラルメは、帆なく帆桁なく、また約束の地にもいたらぬ破船の姿に、己の旅の運命をみたのである。荒海と帆船、破船、それでもの出発、これらのイメージはけっして、マラルメの独創ではない。しかし、出発はおろか、まだ旅立ちをおもう段階で、すでに破船の姿にしか旅の果を予想できないこのヘシシムは、マラルメ独自の。そしてこの悲哀の背後でなおも旅への想が絶えないとすれば、マラルメ以外の何ものでもあるまい。

Mais, ô mon coeur, entends le chant des matelots!

(Brise Marine)

もはや「旅へのうやなう」ではない。憩と快楽を約するまろやかな一語《Invitation》は、苦惱とむなしさに彩られ、あきらかに悲劇を内包する《Hantise》をもつておきかえられるべきであらう。

Où fuir dans la révolte inutile et perverse?

Je suis hanté, l'Azur! l'Azur! l'Azur! l'Azur!

(L'Azur)

ほほをなげる海辺の微風にすら、嵐と破船をおもうマラルメ。しかもなお旅立つはかなないマラルメ。やがてくりひろげられゆく一つの悲劇の因は、二十三才の若き詩人にとって強固なるこの《La hantise du voyage》と要約されるのである。

註 1 ロンドンからアンリ・カザリスに宛てたもので、作品

《Les Fenêtres》の制作年代、制作意図を詩人自身で明らかにしている点で重大である。なお手紙の中でマラルメは、エマニエルをこうした近代詩人の一人に数えて直接に攻撃しているが、彼にとつてボードレールこそこれらの詩人の中で最大のものではあったことは確実である。またマラルメにとつて理想と現実とは、ここで問題になっている《Les Fenêtres》の中にきわめつくされているといつてよいのである。

2 あきらかにネルバルの死（一八五五）が想起されている。

3 ボードレールの一行、

...le parfum...

Se mêle dans mon âme au chant des mariners.

(Parfum exotique)

と同工ではあるが、マラルメにはボードレールのもつ、何かしら苦惱を調利へと誘う如き力を潜在せしめる余裕がない。《Mais》が一語にしてその差をいいつくすであらう。

友よ船出せん

《マラルメ詩集》の冒頭を飾るソネット《Salut》にみられる旅のなまじは、《Brise Marine》からほぼ三十年をへたてて、一層強固に詩人をとりこへはなれずにいる。

Rien, cette écume, vierge vers

A ne désigner que la coupe;

Telle loin se noie une troupe

De Sirènes mainte à l'envers.

Nous naviguons, ô mes divers

Amis,...

(Salut)

われわれを驚かすのはその技巧の極、イメージ生成の妙であるが、また、『Brise Marine』との間に、何かしら一つの変調がおこっていることにも気づかすにはおれない。この変調とは、『Le partirai』から『Nous naviguons』への、詩人の姿勢の変化に要約されるものである。

『Les Fenêtres』『Les Fleurs』などをはじめとする初期詩編を通じて、次第に純粹詩の領域に身を没入せしめたマラルメは、外面では平穩な、しかし内面には苦惱のうずまく冥想の年月をへて、遂に『Hérodiade』と『Après-midi d'un Faune』へと登りつめた。仮りにこの境地が旅路の果の理想境であつたなら、やがて訪れる詩人の晩年は、調和と美にみちみちていたはずであらう。まさにボードレールの夢みた如く。

Là, tout n'est qu'ordre et beauté

Luxe, calme et volupté.

(L'Invitation au Voyage)

早くからマラルメにとって、詩とは世界と人間とに「意味」を与える手段であつた。うつろい易い感覚と出来事の領域の現実を、定義と必然の永遠の領域へと導き変身せしめる手段でなければならなかつた。クロードルが指摘したように、外界の対象を前にしてマラルメはまず問う。「これはどういう意味なのか」と。結果、かくされ

た眞実をあらわにする為、現象という偽りの衣は、一枚ずつはぎとられてゆく。しかし現象の衣は何かをおおいかくしていた訳ではなかつた。さらに正確にいえば、すべての現象の底には虚無の深淵のみが現前するのであつた。人間精神にとってまさに耐えがたいこの発見を前に、なおもマラルメの希求するのは、詩が、そして詩のみが、この虚無をすら、永遠と必然の世界に、意味あるものとして転入せしめることなのである。

そこにはこえがたいパラドックスが存在した。やがて詩人は、理想の作品が現出せしめるはずのもの Beauté への確固たる信念と、すべては Néant に帰すことの絶対的知覚との間にゆさぶられることになる。しかもこの苦闘に、何ものにも譲りがたい詩人としての矜持 *Pride* が介入する時、悲劇はますますあざやかなものとなるのであつた。若いころから詩人を苦しめつづけた例の無力感が、一層如実に彼をおびやかす。苦惱の努力のすえに虚無を画くほかはない詩作というものの二重のむなしさ。空虚に対する最善の方法は、また完全な沈黙ではあるまいか。訪れくる沈黙はまさに必然であつた。

詩人としてのマラルメの生涯には、二度の大きな沈黙期がみつめられる。第一はトゥルノンでの、いわゆる形而上的探究の時期であつた。この沈黙が詩人に、将来の全著作の基礎をうちたてしめ、やがて来るエロディヤードと半獣神の世界を準備させたのである。一方、第二の沈黙期、ヌウレのいわゆる『Sept ans de silence』は、前者とは多少様子を異にしている。たとえ誤解、非難、狂信につつまれながらではあつても、すでにマラルメの名は詩壇でも高かつた

のであり、その人が七年近く一編も新作を発表せずにいたことは、何かしら異様なものが感じられないだろうか。

一八七七年から八三年にかけてのマラルメは、優れたポオ翻訳者、奇妙な雑誌の主幹、普仏戦争に散った友を悲しむ市民、第二子を失う不運の父、パリに職を求めて運動する英語講師、贈られた書物の礼状を書き、文学集会を主唱する文壇著名人、そして次第に友をひきつけ、火曜会の主となりゆく人、としてのマラルメであった。奇妙な、マラルメ自身は詩作品とは認めなかった短詩群 *vers or circumstances* の大半がこの時期に作られ、贈られている。これらは、あるいはチョコレートの一箱とともに、あるいは扇面を飾り、遂には韻をふみ四行に分けられたアドレスとなつて、マラルメの名を運んだのであった。すくなくとも表面的な事実によつては、この期のマラルメは、苦吟する部屋の詩人とはみえぬのである。八四年、ヴェルレーヌの《呪われた詩人達》が、未発表詩編の集録によつてこの沈黙を破るきっかけを作るまで、詩人の内面にいかなる変化が起つていたのか、今となつてはわずかに推測するほかはない。

第二沈黙期をへだてた後期マラルメの作品群の特徴には、第一そのほとんどがフランス式、というよりマラルメ式な、ソネットであること、第二に、あつかわれる主題は常に同一といつて良く、ただ難解をきわめた象徴的詩法がその把握を困難にしていること、第三には、《Hommage》あるいは《Tombeau》と題される詩群が存在すること、などがあげられよう。とりわけ第三の特徴には注目して良い。生死をとわず、ともかくある個人への「頌」としての形式と発想は、初期のマラルメには稀有なものであった。たとえばマラル

メ夫人とジュヌビエールの姿を《*Prise Marine*》の一行、
Et ni la jeune femme allaitant son enfant.

にかいまみるはかなかつたわれわれは、今二人の各々に贈られたソネットを示され、驚きを禁じえない。

年とともに孤独の詩人の眼が社会的広がりを持ちはじめたのか、詩壇の一方の指導者としての自覚のめざめか、伝統的サロン文化への譲歩であつて、あれほど強固だつた *Pureté* も遂に弱まる時になつたのか。ともかくも詩人は変貌をとげたかのである。はたしてこの変貌は、内面的にもまた深々と根を下ろしたものであつたらうか。

Nous naviguons, ô mes divers

Amis, moi déjà sur la poupe

Vous l'avant fastueux qui coupe

Le flot de foudres et d'hivers ;

(salut)

この *Nous* は、ランボーの、吾にして他者、他者にして吾、といったようなものではない。マラルメは明白に *Moi* と *Vous* とを対置せしめている。そこには、自己を完全に *Nous* の中に埋没することの出来ない詩人の姿がある。*Nous* とよびかけつつマラルメは、ただちに、*Moi* と *Vous* とのいたいほどの相異に気づかずにはおれないのであった。そして同時に、老境に入った詩人の、先達としての自負が存在する。

Une ivresse belle m'engage

Sans craindre même son langage

De porter debout ce salut.

(ibid.)

まさに「旅へのいざない」である。さてマラルメは若き詩人達を、いかなる旅に誘うのか。

Solitude, récif, étoile

A n'importe ce qui valut

Le blanc souci de notre toie.

(ibid.)

船は高く帆を張っている。孤独と暗礁が行手にあろうとも、彼方サイレンの踊る海原へ、船は力強い出航を準備する。あの日抱かれた破船の予想はいずこにあるのか。マラルメもまた嵐を切る白い帆のみを夢みるのか。その《いざない》は、何処の地を約するのか。そしてきりげないこの一行、

Solitude, récif, étoile

に、実は依然として悲劇的な航路の果が予想しつくされていることを、杯をあげて眼を輝かせた若い詩人達は読みとっていたであろうか。

註1 《Salut》は一八九三年、雑誌《La Plume》の年次例会の席上、マラルメ自から片手に杯をあげつつ朗読したものである。彼の残した最高の作品のひとつとは言えないが、形式、内容ともに、後期マラルメ手法のひとつの典型を示すものである。

2 孤独、暗礁、星辰、とならば、この星は、海路の指針、極北に不動の光を思わせる。詩人は、苦難の旅も星辰に導か

れて行こうと誘うかのようにである。しかし実はこの星は、むしろ一つの悲劇の予兆として輝くのである。マラルメの詩編中で星辰は、常に、一場の悲劇の発生と終末に立ちあう非人間的な証人であった。

L'espace...

Roule dans cet ennui des feux vils pour témoins

Que s'est d'un astre en fête allumé le génie.

(Quand l'ombre menaga de la fatale loi...)

今この星の姿には、他ならぬマラルメの破船の劇の証人、決定的結末の後に冷く輝きつづける非情な星への、ひそかな言及がある。

ひたすらな旅のおもひ

マラルメが自から要約しているように、「身近なものから離れ、旅立ちたいという説明不能な欲求」をうたった《Brise Marine》の中に、すでにその運命を予言された船。理想に燃る若き詩人達をへききに、真冬なす浪を切らんとする《Salut》の船。そしてもう一編、高く帆を張って波間におどる船を歌ったソネットが残された。⁽¹⁾

Au seuil souci de voyager

Outre une Inde splendide et trouble

—Ce salut soit le messenger

Du temps, cap que ta poupe double

ヴァスコの船はいま岬を回る。時間の岬をめぐりインドの彼方へ

と消えてゆく。意志と海上の英雄ヴァスコよ、このソネットが現代のわれわれからささやかな讃歌を、はるかに君に届ける使者であつてほしいと思う。

ヴァスコの大帆船は高く帆をはり、大波を切りさいて進みゆく。あの日、陸地を告げる鳥達が、まるで白い泡のように、帆船とともに浮き沈みしたことであらう。

Comme sur quelque vergue bas

Plongante avec la caravelle

Ecumait toujours en ébats

Un oiseau d'annonce nouvelle

この鳥は今陸地の宝庫と鉱脈を告げる。水夫達は華麗のインドを思つて喜悦の叫びをあげたことであらう。しかしヴァスコのはほえみは青ざめて悲しげであつた。彼にとつて陸地の宝庫は所詮益もなく、夜であり、絶望でしかない。ヴァスコの船はただひたすらに直進すべきもの。あの日の鳥にも似たこの頃は、ただひたすらに旅を思うヴァスコにとつては、単調にまたむなししい叫びでしかあるまい。

Un oiseau d'annonce nouvelle

Qui criait monotonement

Sans que la barre ne varie

Un inutile gisement

Nuit, désespoir et pierrerie

Par son chant refleté jusqu'au

Sourire du pâle Vasco.

死の国へ旅立った偉大な魂にとつては、墓石を敬虔になぞる手も、かかげられる記念の浮彫も、花束も、色ざめた悲しげなほえみをさそうだけではない。この考え方はマラルメの *Tombeau* 詩群に共通してみられるものである。

この船は末だ高らかに帆を張つてはいるが、その運命は遂に破船か、ヴァスコの死でしかあるまい。なぜならヴァスコの思ひは、ただひたすらの旅を思う心であり、

Au seul souci de voyager

もはや異邦に人を誘うことではなくなっている。そのおもい、はるかインドを越えゆくほかはない。

Outre une Inde splendide et trouble

旅立ちのための旅立ち、航海の為の航海、約束の地を問題にしない旅へのおもい。三十年をへだててかの *La Hantise du Voyage* が、偉大なる旅人ヴァスコ・ダ・ガマの姿をかりてよみがえりくる。

この船の姿、船長の姿は、ぬぐい切れない悲哀に彩られている。旅の為の旅、詩作の為の詩作への強い意欲と信念に支えられながらも、浮びくる微笑は青白い。破船と死のイメージは老境の詩人に、否み難い重みをもつて迫らずにはいないのであつた。

註1 この奇妙な無題のソネットは、ヴァスコ・ダ・ガマのインド航路発見四百年記念行事として計画されたアルバムのために作られたものである。表面的には勿論ヴァスコ頃であるが、マラルメにとつて重大な旅の主題をあつかつては、単なる頃に終らなかつたのである。

たゞ、

Si notre idée avec ne sculpte un bas-relief
Dont la tombe de Poe éblouissante s'orne

(Le Tombeau d'Edgar Poe)

Quel feuillage séché dans les cites sans soir
Voit pourra bénir comme elle se rassembler
Contre le marbre vainement de Baudelaire

(Le Tombeau de Charles Baudelaire)

Le noir roc courroucé que la bise le roule
Ne s'arrêtera ni sous de pieuses mains

(Tombeau de Verlaine)

マラルメにとつて、この偉大な魂を、真にほめたたえる者は、ほかならぬ彼等の作品を真に理解するものでなければならなかった。作品のみが永遠の内に彼等の姿をあかしづけるのであるから。

Tel qu'en Lui-même enfin l'éternité le change,

(Le Tombeau d'Edgar Poe)

なお『Toast Funèbre』はこの考え方の原型となつてゐる。

ああ 墳墓の破船

いかに果なき派路であらうと、遂に従うはかない運命がいま展開される。その時、重々しく雲はたれこめて、汽笛はもはや鳴りひびくすべを失うであらう。

A la nue accablante tu

Basse de basalte et de laves

A même les échos eselaves

Par une trompe sans vertu

最後のそして致命的な嵐はすぎ去り、名残りのうねりのまにまにただようは、墳墓の如き破船。かつてこの船の誇りであつた帆桁も、今は帆をはぎとられ、むなしく波頭に没せんとする。嵐はいかに荒れ、船はいかに英雄的に戦ひそして負れたのか。わきたつ白い泡、おきえだけがそれを知つてゐる。やがて、鬼作『Un coup de Dés jamais n'abolira le Hasard』が画きつくす難破の光景は、このソネットに原型をのこつてゐる。

Quel sépulcral naufrage (tu

Le sais, écume, mais y baves)

Suprême une entre les épaves

Abolit le mât dévêtu

へりひびくられる悲劇は止むべきところを知らない。二十三才の

マラルメが抱いた破船の予兆、

Perdus, sans mâts, sans mâts, ni fertiles flots...

は今、達せられんとする。

詩集の最後から二番目におかれたこのソネットは、あきらかに詩人生涯の、したがつてこの詩集そのものの迫るべき運命をうたう。

この一巻は詩人の誇り、高きマストであるのだが、今となつては海上にただよう漂流物にすぎない。書はやがて、最後のソネットとともに、決定的に閉ざされるであらう。

Mes bouquins refermés sur le nom de Paphos,
たとえ末だ消しがた、否一層強まりゆく信念が、Vanité となり
Orgueil となつて残るのみ……

Je pense plus longtemps peut-être éperdument
A l'autre, au sein brûlé d'une antique amazone.

(ibid.)
かつてはるけき海原に乱れ泳ぐさまのみえたサイレン、理想の詩
の姿。

Telle loin se note une troupe
De sirènes mainte à l'envers.

詩人は今自分を、このサイレンの子と自覚する。歌声の魔力で船人
をひきつけずにはおかぬかのサイレン、海と空の接するところに酔
いしれているサイレン。

…parmi l'écume inconnue et les cieux!

まさに詩人はその子たるにふさわしかろう。しかるに今は、この
サイレンの子すらもおぼれゆかんとする。マラルメの破船は、単に
詩集の漂流をもつては終らない。それは必然に船人たる詩人自身の
存在をも海底にと強要せずにはいない。すでに転じはじめた純正悲
劇の歯車は、決して止どまることはない。主人公達のすべてが、宿
命への犠牲とささげつくされる瞬間までは。マラルメの旅路は、偶
然に病人だ人間が、必然の支配する超人の世界に向かう、果もない
旅路であつた。その旅も今、襲いくる嵐にあつて終末を告げる。こ
の死は偶然か必然か。おぼれゆく詩人の最後の意識はなおもうごめ
くであらう。

Ou cela que furibond faute
De quelque perdition haute
Tout l'abîme vain éployé

Dans le si blanc cheveu qui traîne
Avarement aura noyé
Le flanc enfant d'une sirène.

海原はマラルメの悲劇の舞台。今その幕の降る時、主人公は死に
たえ、ただ舞台のみが、起ったことのかすかな予韻をこめて、横た
わっている。何事もおこらなかつたのではあるまいか。すべては幻
想ではなかつたのか。すべては虚無に帰するほかないのか。詩人を
とらえ、はなさず、ただひたすらのがれ旅立つ為に海原へ誘つたあ
のおもいは、何処から来て何処へ消えるのか。

マラルメとともに読者も、心ゆさぶられつつ、詩集の頁を閉じざ
るを得ない。古書は閉じられぬ、寸前、詩人のつぶやきを耳にする
思いが襲う。

Croyez que ce devait être beau... (一)

註1 アンリ・モンドールの「マラルメの生涯」によれば、この
言葉は、詩人の死後その机上に、半ば書きかけのままで残さ
れていたものである。

星辰のみは輝かん

深淵へと姿を消すマラルメの船の運命は、もはやとどめるすべも
ない。しかし吾々には、この船がいかに荒海に耐え、いかに沈んだ
のか、そしてすべてが終った時、残るのはただ虚無のみなのか、と

問いかけることが残されているかのようである。悲劇の証人が、次第におさまりゆく海面の泡でしかないとするれば、

…(tu)

Le sait, écume, mais y baves)

ひとたび沈んだ船を幻として海面によびもどすほかはない。悲劇は今再演される。吾々は今、破船の秘密をあかされようとしている。

「美しい抽象画帖、知的危機あるいは知的波瀾のこの意譯文字的景觀」とヴァレリがよんだマラルメの遺作『*Un Coup de Dés jamais n'abolira le Hasard*』は、その奇怪な形態と内容で、詩人の辿らねばならなかった宿命のすべてをあかさんとする。

嵐はその極みをすぎた。懸命の抵抗を続けた船は今破船となりはて、傾きつつ海中に没しゆく。かつては自信にみちて舵をとった船長は、すでに足元を洗う波を凝視しつつ、旅立ちの為旅立った人としての最後の戦いを試みようとする。死に直面しつつ意志をこめて賽を投ぜんとする。この賽の目数が主人公の意志のままになりうるなら、つまり意志が偶然を必然へと転生せしめるならば、たとえ今となって死が不可避だとしても、その死は偶然の死の汚名をまぬがれるであろう。遂に首まで没した船長はためらいのうちに、決定的一句が浮びくるのを感じる。

Un coup de dés jamais n'abolira le hasard

賽をにぎりしめた船長の手は音もなく水中に没する。その死とその航海は益もなく無力な人間の努力にすぎなかったのか。今海面に嵐の名残りもない。何事も起らなかったのではあるまいか。しかし見よ夜空の彼方、暗黒のピロードの上に、極北の七つ星が転じゆ

く。

アランはこの奇妙な作品は、詩作において遂に偶然の産物を十全に排棄することが不可能であることをうたっていると言った。投げだされる賽という奇妙なイメージがマラルメにとって詩作行為が何であるかを示している。すなわち賭なのである。気晴しの賭ではない。彼にとって生存の至上理由が即詩作であつたのだから、自己の生そのものを賭けたのでなければならぬ。まさにマラルメの旅は自から嵐を招く旅であつたのである。

Et, peut-être, les mâts, invitant les orages

Sont-ils de ceux qu'un vent penche sur les naufrages
Perdus, sans mâts, sans mâts, ni fertiles îlots...

ポードレールの近親としてのあの現実憎悪から、何とほるべく隔たつたことか。理想世界からあらゆる現実の要素を否定しきろうとした欲求は、マラルメの精神宇宙を、彼が一市民として質素に、しかし見事に生きた現実から、まさに次元を隔てる彼方へと志向せしめた。はたしてこの旅は不毛の極北への旅にすぎなかったのか。マラルメ解釈の一つの鍵がここにあるといえる。

一人の若き詩人が、まず自己に可能なものはかえりみず、ただ自己の欲するものへと結びつく。欲求より発して、全から無に移り、再び欲求に回帰する深刻な自己分裂、これらの諸相のひとつひとつに應じて、矛盾し平衡する思想が作品を生んだ。ヴァレリはこれを見事にみぬいて言っている。

「彼の作品を解釈するために、それらの作品を『欲求』と『能力』とに組織的にあてはめながらなされる、充分に精緻な分析こ

そ、その思想、その運命を、疑いもなく明白化するであらう。」

(Je disais quelquefois à Stéphane Mallarmé)

マラルメの旅は、常に北極星に導かれつつも、ついに星の高みにはいたり得なかった。しかしこの星々が今、輝く七つの目となつて転ずるのである。この大空の賽は、何人の手に振られたのでもなく、ひたすら絶対の目として転ずる。たしかに詩人の手は賽を投ぜずに終つたと言える。しかし偶然は依然として排棄されるべきであり、絶対こそ求められるべきであるのだ。

詩人の生涯は敗北であつたかもしれない。しかしこの旅がけつして単なる逃避におわらず、世界と人との意味を与えるとの理想が疑もなく正しかったことを、証明すべき言葉もないこれらの信念を、探究と失敗の歴史を物語りつつもマラルメは、ひそかにイメーヂをもつて示し、やがて来る現世での旅の終末を待つのであつた。

ボードレールの大きさは、彼が汚恥、混濁の巷におぼれ、身をもつて現実の悪を生きたという事実によ来するものでないことは、言うまでもあるまい。アブサンと女性に酔うことが現実の眞の姿を知ることにはならない。ボードレールにははっきり現実逃避の志向がある。ただ彼はそれが不可能だと知る時、神への憧にも似た希求として、美と調和のアイデアを夢み、とりまく仮象の一つ一つに、俗人のすててかえりみないこの眞の美の反映をみいださんとする。結果、彼は対象のとらえ方そのものに、新しい方法の世界を開いたのであつた。その為の夢想の旅は、逃避ではなく、主体性確保への最後の線での抵抗だとみるのが正しい。しかし同時に、彼の開きえた世界は、彼自身にとっては、無知と厚顔の現実からの唯一無二の逃げ

場であつたろうことも、また否み難いのである。

マラルメの市民生活は、まさに健全であつた。しかし、彼がこの中に埋没しきれず、常に現実を仮象としか考えられなかったのは、これもまたひとつの主体性確保への激しい志向の為であつたとは考えられないだろうか。現象は偽りでしかなく、世界は各人がそれについて持つアイデアに応じて現出するという、シヨウベンハウエルの形而上学の上にマラルメの夢みた世界は、苦惱の現実からの独善的逃避であると同時に、あるいはそれ以上に、虚偽の現実への、孤独の魂の抵抗の所産でもある。彼にとつて詩とは、まさに世界と人間に意味を与えるものであつたことを想起しよう。

マラルメの旅が、遂に一つの悲劇であつたとしても、それはこの旅が言語の極北への孤高の旅であり、言語とともに詩人も吾々の現実を飛び去つたからではない。飛び去つたとすれば、この理想境そのものが、マラルメ自身からも飛び去つたのであつて、詩人マラルメが、遂に現実にとどまり、人気のないサロモンの墓地に、一英語教師として葬られねばならないことに、悲劇はその眞の姿をあらわすであらう。